第７章　活用

１　活用の現状と検討項目

活用については、以前から市民団体などが主体となって下野谷遺跡のパンフレットを作成したり、講演会を開催したりするなど、保存や普及に向けた活動が活発に行われており、そのことが、現在の下野谷遺跡公園の開園にもつながっている。下野谷遺跡公園の開園後も、行政と市民が連携して活用事業を活発に行い、その中で国史跡指定への気運が醸成されてきた。多方面にわたる活用とそれを担ってきた人々の存在は、史跡下野谷遺跡の貴重な価値の一つである。

一方で、さらなる活用を進めるためには、以下の検討を要する事項もあげられる。

【検討項目】

・史跡の解説や出土品の展示・保管施設が史跡の近くにあることが望ましい。
・史跡の魅力やアクセス方法などの情報を幅広く行う必要がある。
・団体見学の受入れのため、大型バスのアクセスを可能にすることや、駐車スペースを設ける必要がある。
・誰もが参加できるよう、史跡や展示施設をユニバーサルデザインとする必要がある。
・市民団体等の活動の拠点となる場所が必要である。
・まちのにぎわいに資する取組を展開していくことが重要である。
・史跡を核とした人や社会のネットワークの形成に資する取組が望まれる。

【現状での活用事例】

① 下野谷遺跡の普及イベント

毎年、春と秋に下野谷遺跡公園において普及イベントを開催している。特に、秋に開催する「縄文の森の秋まつり」は、地域の商店会、自治会、市民団体、ボランティア、学生などが運営スタッフとして参加し、火おこしや弓矢などの体験コーナー、ステージ演奏などを行っており、毎年多くの来場者が訪れるイベントである。

また、郷土資料室においても、市内の文化財の普及啓発事業の一環として下野谷遺跡や縄文時代をテーマとした講演会やワークショップなどの事業を実施している。

縄文の森の秋まつり

◆平成 28 年度の主なイベント

「縄文のムラで春風と遊ぼう！（平成 28 年５月）」、「親子縄文土器づくり体験教室（全３回７～８月）」、「文化財講演会　気候変動と縄文文化の変化（８月）」、「見て！さわって！作って！秋のワークショップフェス（９月）」、「縄文の森の秋まつり（10 月）」、「ＶＲで下野谷遺跡を大冒険!!（平成 29 年３月）」

植物からの糸作り体験
（縄文のムラで春風と遊ぼう！）

② 国史跡指定記念シンポジウム

下野谷遺跡の国史跡指定を記念して、これまで３回のシンポジウムを開催している。他自治体の協力を得ながら、下野谷遺跡の普及啓発とともに、下野谷遺跡の今後を考える契機となるよう、設定したテーマに基づく講演や活用事例紹介、講演者によるパネルディスカッションを行っている。

・第１回　縄文時代の大集落遺跡を探る・護る・活かす
　代表的な縄文時代中期の遺跡の調査や活動事例を通し、考古学的な意義や地域の宝としての活かし方を探る。

・第２回　森・海・山の縄文
　「森」の集落下野谷遺跡に加え、海・山の恵みを受けた遺跡を取り上げ、考古学的な意義や市民活動を考える。

・第３回　えっ！マメとエゴマでヘルシーライフ！？
　縄文時代の植物利用と圧痕分析の成果発表および、市民協働研究について考える。

第１回シンポジウム会場

第２回シンポジウム展示コーナー

第３回シンポジウムの様子

③ 下野谷遺跡デジタルコンテンツ

下野谷遺跡の価値と魅力をわかりやすく伝えるため、当時のムラの中にいるようなＶＲ（バーチャル・リアリティ）映像や、縄文時代のくらしの解説･クイズなどにより楽しみながら学ぶことができる「ＶＲ下野谷縄文ミュージアム」を制作している。

タブレット 50 台は学校教育現場や生涯学習、イベントなどで活用している。

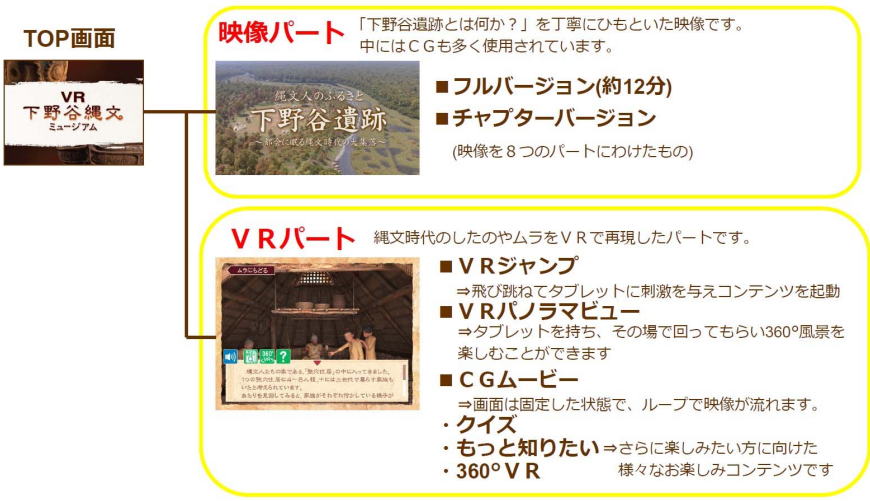
また、スマートフォン用アプリの無料配信を行っている。

学校教育現場での使用風景

イベントでの使用風景

タブレット使用イメージ

◆ＶＲ下野谷縄文ミュージアムの構成



④ 下野谷遺跡のキャラクターの活用

下野谷遺跡を幅広い年齢層に普及させていくため、公式キャラクター「したのやムラの『しーた』と『のーや』」を活用している。

狩りの練習をしている男の子「しーた」と、土器づくりの勉強を始めた女の子「のーや」は、今から 4,500 年前の「したのやムラ」に仲間と一緒に暮らしていた設定で、各種媒体に登場している。

したのやムラの「しーた」と「のーや」

©T&K／西東京市

「しーた」と「のーや」使用例

写真左：下野谷遺跡副読本「しーたとのーやのじょうもんものがたり」
写真上：下野谷遺跡紹介アニメ「したのや遺跡縄文物語」より
写真右：広報西東京（平成 29 年 1 月 1 号）

⑤ 学校教育との連携

次代を担う世代に下野谷遺跡の価値を伝えていくため、下野谷遺跡からの出土品を展示している郷土資料室への団体見学受け入れや、市内小中学校での総合的な学習の時間や社会科（歴史）等の出前授業や遺跡見学などを積極的に行うとともに、学校教育の現場と連携し、下野谷遺跡を生きた教材として活用するための取組を行っている。

郷土資料室での授業の様子

◆市立中学校での「下野谷遺跡出前授業」

市内の市立中学校全９校の１年生を対象に、下野谷遺跡出前授業を実施している。

パワーポイントでの下野谷遺跡についての説明や、「ＶＲ下野谷縄文ミュージアム」によるＶＲ体験、また実際に下野谷遺跡から出土した本物の土器に触れる体験により、自分たちの住んでいるまちに、未来に残すべき貴重な文化遺産「国史跡下野谷遺跡」があることを知る機会となっている。

中学校出前授業の様子

本物の土器を見る様子

◆副読本での学習

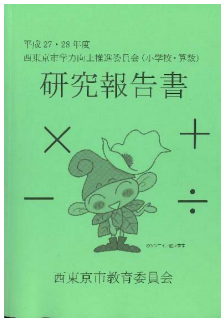
小学校３、４年生が使用する副読本『わたしたちの西東京市』に下野谷遺跡のページを設け、地域の大切な歴史文化としての意識が根付くよう、授業などに活用している。

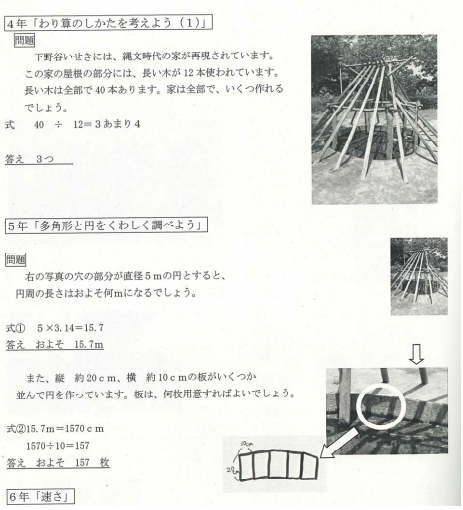
◆地域の宝を英語で発信

市立中学校２年生の英語でふるさとをＰＲするための学習に下野谷遺跡を活用している。

◆歴史や自然学習以外の分野での活用

算数の学習に下野谷遺跡を活用するなど、多方面で学習の題材として下野谷遺跡を利用する試みを行っている。





算数の教材研究で用いられた例

コラム

東伏見小学校での取組

史跡に近接する東伏見小学校では、下野谷遺跡の特別授業や郷土クラブの新設、児童による「東伏見歴史館」開設のほか、運動会や展覧会などの学校行事において下野谷遺跡を題材とした作品作りや発表を行うことにより、児童だけではなく保護者や地域への普及啓発を図る取組を行っている。

運動会の全校ダンス（したのや縄文体操）

下野谷遺跡公園での特別授業の様子

収蔵庫を整理して開設した東伏見歴史館

展覧会で６年生が製作した土器の展示

⑥ 地域との連携

地域では、地元商店会が市のイベントに参加することに加えて、地元商店会主催事業においても地域の文化遺産として下野谷遺跡が紹介されており、地域から下野谷遺跡を応援する取組が行われている。また、下野谷遺跡の普及啓発のために地域団体が考案した「したのや縄文体操」は、市や商店会イベント、地元小学校で活用されている。

地域イベントで披露されたしたのや縄文体操

地域イベントでの紹介

縄文の森の秋まつりでの出店

東伏見駅のイルミネーション

コラム
地域資源としての活用（下野谷遺跡関連商品の開発・販売）

下野谷遺跡の普及と地域振興を目的として、地域の商店会等の協力のもと市内の商店が、縄文時代や下野谷遺跡キャラクター「したのやムラの『しーた』と『のーや』」など下野谷遺跡をモチーフとした商品を開発し、販売を開始している。これらの商品を市のイベントで市が紹介するなど、地域と市とが連携し、地域資源として下野谷遺跡を活用する取組を行っている。

市内商店が開発・販売している商品を紹介したパンフレット

東伏見駅周辺への縄文モニュメントの設置

下野谷遺跡を活用して地域の魅力向上や新たな賑わいの創出を図るため、東伏見駅周辺から下野谷遺跡までの間に、まちのシンボルとして、出土した縄文土器や下野谷遺跡キャラクターのモニュメントを設置している。南口駅前広場内のモニュメント台座では、遺跡の概要やアクセスを表示しているほか、内蔵している音声ガイド装置により遺跡を解説するものとなっている。

⑦ 市民と協働した取組や事業

普及啓発事業においては、地元商店会や市民団体、学校等の様々な主体との連携した取組を行っているほか、大学・研究者や市民団体と市とが協力し、下野谷遺跡から出土した土器を研究材料として最新の分析を行うなど、新たな価値や魅力を見出すための調査・研究面における取組を行っている。

コラム
研究者・市民が協働で行う最新の縄文時代研究

平成 25 年から、下野谷遺跡の土器に残る植物などの圧痕を探し分析する活動を、専門の研究者、考古学を学ぶ学生、市民活動団体、行政担当者などで構成された合同研究チームを立ち上げ継続して行っている。下野谷遺跡での植物利用にとどまらず、縄文時代の有用植物の栽培化などの最新の研究テーマの解明に市民も直接関わることで、遺跡への愛着を深める機会となっている。

市民を含む合同研究チームによる調査

⑧ 生涯学習に関わる取組

公民館や高齢者大学・市民団体主催で、下野谷遺跡に関わる成人向け講座が開講されている。その取組の中から下野谷遺跡や縄文時代を学ぶ自主サークルが生まれ、下野谷遺跡公園でのイベント「縄文の森の秋まつり」などの場でも遺跡の普及などの活動をしている。

⑨ 大学との連携

下野谷遺跡の発掘調査や出土遺物の整理には、考古学を学ぶ大学生が参加しており、実際の調査・研究の現場を体験する機会となっている。また、縄文の森の秋まつりやシンポジウムなどの普及イベントでは、毎年多くの大学生が体験コーナーや遺跡解説などに運営側として参画し、研究や学びの場となっている。

縄文の森の秋まつり（火おこし）

⑩ 市内関連施設との連携

市域に所在する多摩六都科学館とは、ワークショップや企画展示、プラネタリウムを活用した講演会などのほか、プラネタリウム番組において、下野谷遺跡デジタルコンテンツを活用したプログラム「縄文人が見た星空」を上映するなど、連携事業を実施している。

また、史跡としての指定時などには、駅前商業施設における企画展示や懸垂幕掲示の協力を得ることで、広く周知を図っている。

「縄文人が見た星空」チラシ

⑪ 関連自治体との連携による事業の実施

他の自治体の縄文時代遺跡担当者などを招き、シンポジウムや講演会を開催したり、また市の担当者が他の自治体に招聘され講演を行うなど、遺跡を要とした交流を行っている。

例えば、西東京市の友好都市である山梨県北杜市には、数多くの縄文時代の遺跡があることから、交流事業として北杜市に所在する遺跡の発掘体験事業を実施した。同時代の他の遺跡を知ることにより、改めて下野谷遺跡の価値や魅力を発見する機会となる。

北杜市での発掘体験

⑫ 西東京市郷土資料室での出土品等の展示

西東京市郷土資料室は、市内の郷土資料（考古資料・歴史資料・民具・民俗資料）を収集･保管･保存･展示するための施設であり、５つの展示室で資料を公開している。このうち、展示室２を「南関東で最大級の縄文集落　国史跡下野谷遺跡を知る部屋」として、下野谷遺跡から出土した石器や土器を常設展示し、本物の遺物のもつ魅力を感じ、学ぶことができる場としている。また、下野谷遺跡関連のワークショップ等のイベントや、土器などを携えた市域の各地域へのアウトリーチ活動を行っている。

展示室２での土器等の展示

⑬ 活用に向けた出土品の管理（データベースの作成）

現状では出土品が複数箇所に分かれて収蔵されていることから、出土品の管理と資料を見学、利用するためのデータベースを作成している。

⑭ 情報発信

主に市の広報やホームページで広域的な情報発信を行っている。グローバル化に対応するため、平成 28 年度にはホームページの下野谷遺跡の解説を多言語化（英語、韓国語、中国語（繁体字・簡体字））し、世界に向けて発信している。

また、パンフレットやリーフレットを作成し、遺跡の普及に努めているほか、イベントなどにあわせて下野谷遺跡のキャラクターやモチーフをあしらった啓発用品を作成するなど、多くの人の目にふれる機会を設ける工夫をし、情報発信に努めている。

さらに、外部の縄文サイトなど、市以外のツールからの情報発信についても連携を図っている。

多言語版ホームページ（英語）

⑮ 図書館ホームページでの下野谷遺跡関連資料等の紹介

西東京市図書館では、西東京市、東京都及び他市区町村、周辺・関連地域に関する歴史資料、行政資料を地域・行政資料として保存し、提供している。

下野谷遺跡に関しては、これまでの発掘調査報告書やパンフレットなどが地域・行政資料として保存・提供されており、図書館ホームページでは「下野谷遺跡関連資料等の紹介」として項目を設けて資料一覧を紹介するなど、積極的な情報提供を行っている。

⑯ 中学生によるまちづくりワークショップ

西東京市文化財保存・活用計画の策定に当たり、中学生による縄文遺跡を活用したまちづくりワークショップを実施するとともに、その成果の発表会を開催した。その際に発案された「縄文給食」などのアイデアは実施にうつされている。

また、本計画策定においても、下野谷遺跡と周辺の縄文遺跡をめぐるバスツアーと意見交換のワークショップを実施し、市の未来を担う中学生のアイデアを募集した。

中学生によるまちづくり発表の様子

実施された縄文給食（クリやきのこ、マスなどの食材を使用した給食）

２　活用の方向性

下野谷遺跡については、このようにこれまでも様々な分野において活用を進めてきており、このことを発展的に継続していくことが重要である。さらに、今後、史跡を保護していくために、調査・研究やその成果についての情報発信、学校教育・生涯学習への活用、市民・市民活動団体との協働事業、市内事業者等との連携など、史跡の価値をより高めるための取組が重要である。また、都市部にある遺跡の魅力をいかした活用を検討する必要がある。

縄文から未来へ　したのやから世界へ

～　「つなげる」「広げる」「集う・結ぶ」「ともに育つ」～

都市部における遺跡の魅力の活用

３　活用の方法　＊縄文の知恵を学び、現代や未来に活かし世界に発信する

下野谷遺跡の本質的価値の一つである「双環状の拠点集落」の特徴は、多世代の人々が居住し、また、広域的なネットワークにより関係性が創られてより多くの人々が集い、結ばれていくことで集落が安定して営まれる点にもある。そこから今後の下野谷遺跡の活用のコンセプトを「つなげる」「広げる」「集う・結ぶ」「ともに育つ」とする。

下野谷遺跡の現地での活用事業のほか、下野谷遺跡の研究成果の発信などを継続するとともに、縄文のムラや縄文の知恵を体感・体験できる史跡整備や、市民、地元関係団体、他自治体等との連携の強化などにより、さらなる効果的な活用を図ることを検討する。

また、活用の拠点となるような施設の設置についても検討する。

活用の柱１　「つなげる」

（１）学校教育や生涯学習での史跡の活用

・次世代へ継承していくためには、学校教育との連携は極めて重要であり、学校との連携を図り、授業に活用しやすい資料や場を提供するとともに、子どもたちが自主的に課題を見出し、それを追求できるような仕組みを検討する。
・幅広い世代に史跡の周知を図るため、生涯学習への資料の提供や、現地で体感・体験できる整備を検討するとともに、参加しやすい仕組みづくりに努める。
・庁内や他の機関と連携し、歴史や自然教育だけでなく様々な分野での史跡の活用を推進する。

（２）文化財活用の拠点としての下野谷遺跡

・西東京市文化財保存・活用計画に基づき、市内の文化財の保存・活用のモデル的な位置付けとして、重点的な取組を行う。
・縄文文化が、歴史文化の基層として現代につながる連続性をもっていることを理解・体験する機会づくりを行う。
・上記の拠点となる地域博物館等の設置について検討する。

活用の柱２　「広げる」

（１）調査・研究の推進

・活用に資する新たな価値や魅力を見出すための調査・研究を積極的に進めることを検討する。
・調査・研究に専門家だけでなく市民も関わることにより、市民参画型の調査・研究を進め、遺跡をより自らに近いものと感じることによる、保護意識の向上に努める。
・縄文時代研究の課題に応える集落遺跡として、国内外に調査・研究の素材を提供し、縄文時代の魅力を発信する。

（２）史跡下野谷遺跡の価値と魅力の周知と発信

・遺跡を知り、その重要性の理解を深めるための普及啓発を推進する。
・デジタルコンテンツ等を積極的に活用し、遺跡の魅力の周知を図っていく。
・縄文文化・下野谷遺跡の情報発信の源であり、日本文化の基層を学び、発信するセンターを目指すものとする。
・研究者等と連携を図り、グローバル化に即した情報発信を行い、下野谷遺跡の価値や魅力を世界に向けて発信していく。

活用の柱３　「集う・結ぶ」

（１）まちのにぎわいを創出する取組

・近年、文化財を地域の資源に位置づけ、地域の賑わいの創出や誇りを持てる魅力として活かすことが求められている。
・まちづくりや地域の魅力として下野谷遺跡を活用した取組を進めるためには、関連する組織や機関、団体との調整・連携が必要である。
・庁内組織に加えて、市内事業者や商店会等と連携し、様々な視点での地域活性化の仕組みの構築を検討し、下野谷遺跡を核としてまちの魅力を増進し、地域活性化に資する活用を目指す必要がある。
・地域にとってかけがえのないものとして捉え、地域の連携協力の気運を醸成する。

（２）周囲の地域資源と一体化した遺跡活用

・史跡の周辺地域には、アクセスの入り口となる西武新宿線東伏見駅、駅周辺の商店街、文教地区を形成する早稲田大学と市立東伏見小学校、豊かなみどりと水の景観をもつ練馬区立武蔵関公園と石神井川、都立東伏見公園などがある。
・史跡の対岸には、市域では唯一中世の遺構が見つかっている下柳沢遺跡があるほか、武蔵関公園を挟んだ東側の台地上には、練馬区の富士見池遺跡群が広がっている。また、西側の低地を挟んだ台地上には東伏見稲荷神社がある。
・上記のような恵まれた歴史、文化、自然、社会の地域資源を活かしたまちづくりや地域活性化の仕組みの構築を検討し、まちのにぎわいの創出に資する取組が望まれる。
・地域の資源を結ぶ活用とそのための整備について検討する。
・こういった多様な地域資源が近接して存在すること、それを活かすことのできる人材が周囲に多く存在することも都市部にある遺跡の優位な点の一つとして捉え、都市部の遺跡活用のモデルケースとして示していくことが重要である。

① 周囲の地域資源の状況

ア）都立東伏見公園

・起伏のある広い芝生の公園で、開放的で多目的に使われている。

・高台からは周辺の景色が良く見え、史跡下野谷遺跡の周辺地形を読み取ることができる。

イ）石神井川沿いの歩道

・歩道が川の両岸とも整備されており市民の散歩コースになっている。

・歩道から史跡の北側の斜面が見え、水場の上の高台に集落が立地していることが理解できる。

・川の流れには水鳥も飛来し練馬区立武蔵関公園の池と共に野鳥観察の場となっている。

ウ）下野谷遺跡公園

・下野谷遺跡の一部を地下に埋蔵保存した公園であり、史跡指定地である。

エ）練馬区立武蔵関公園

・細長い池の周辺に緑地を配した静かな自然景観を楽しむことができる公園である。

・バードウォッチングの拠点になっている。

カワセミを撮影するカメラマン達

池周辺の散策路

オ）桜並木通り

・練馬区立武蔵関公園から武蔵関駅に通じる川沿い（線路沿い）に桜並木がある。

② 東伏見駅周辺

東伏見駅前から南の青梅街道に通じる早大グランド通りを通り、早稲田大学のグラウンドの横を抜けて東西に流れる石神井川を渡り、段丘上に上ると史跡下野谷遺跡に至る。

駅周辺に身近な商業機能の集積が見られる。駅南の西側線路沿いには赤い鳥居が建ち、東伏見稲荷神社への入口を示している。

東伏見駅前

文教地区に隣接した史跡下野谷遺跡

早稲田大学グラウンドの間を抜ける道

石神井川を渡り段丘上に史跡下野谷遺跡

駅前の鳥居

線路沿いの商店

東伏見稲荷参道入口鳥居

東伏見稲荷参道

③ 西武柳沢駅周辺

西武柳沢駅南側にはロータリーがあり、柳沢公民館・図書館がある。駅の南北には身近な商業施設の集積があり、線路南側を東に抜けると都立東伏見公園及び東伏見稲荷神社に至る。

西武柳沢駅南口

柳沢図書館・公民館

線路沿い商店

④ 史跡下野谷遺跡を活かす周辺環境との関連

ア）東伏見駅から史跡へ

東伏見駅の周辺には身近な商業機能の集積があり、ここを史跡下野谷遺跡の回遊起点として早大グランド通りを抜けて史跡に至るルートをたどると史跡下野谷遺跡が石神井川より高い段丘上にあるといった立地が理解できる。

こうしたルートには史跡へ人の流れを誘導するための案内板や説明板の設置が望ましい。

また、史跡のキャラクターを用いた商品の開発を進めるなどし、史跡の価値をまちの豊かさに繋げることを検討する。

イ）文教地区に隣接する史跡

駅周辺は商業地域として賑わいを感じる町並みが形成されている一方、早稲田大学のキャンパスがあり、落ち着いた文教地区を形成している。早稲田大学は下野谷遺跡の調査も実施しており、今後、大学との連携を図り活用を進めることが重要である。

ウ）石神井川との関連

史跡下野谷遺跡は、水場としての石神井川と、開けた台地上の平坦部を立地条件としていると考えられている。周辺のまちづくりのコンセプトにも「水とみどり」への視点が盛り込まれており、石神井川とその崖線や隣接する公園の緑を活用することが重要である。

エ）周辺の文化財、自然との関連

周辺には、東伏見稲荷神社をはじめとした文化財、都立東伏見公園、練馬区立武蔵関公園など豊かな文化と自然に恵まれている。これらを一体として活かすことを検討する。

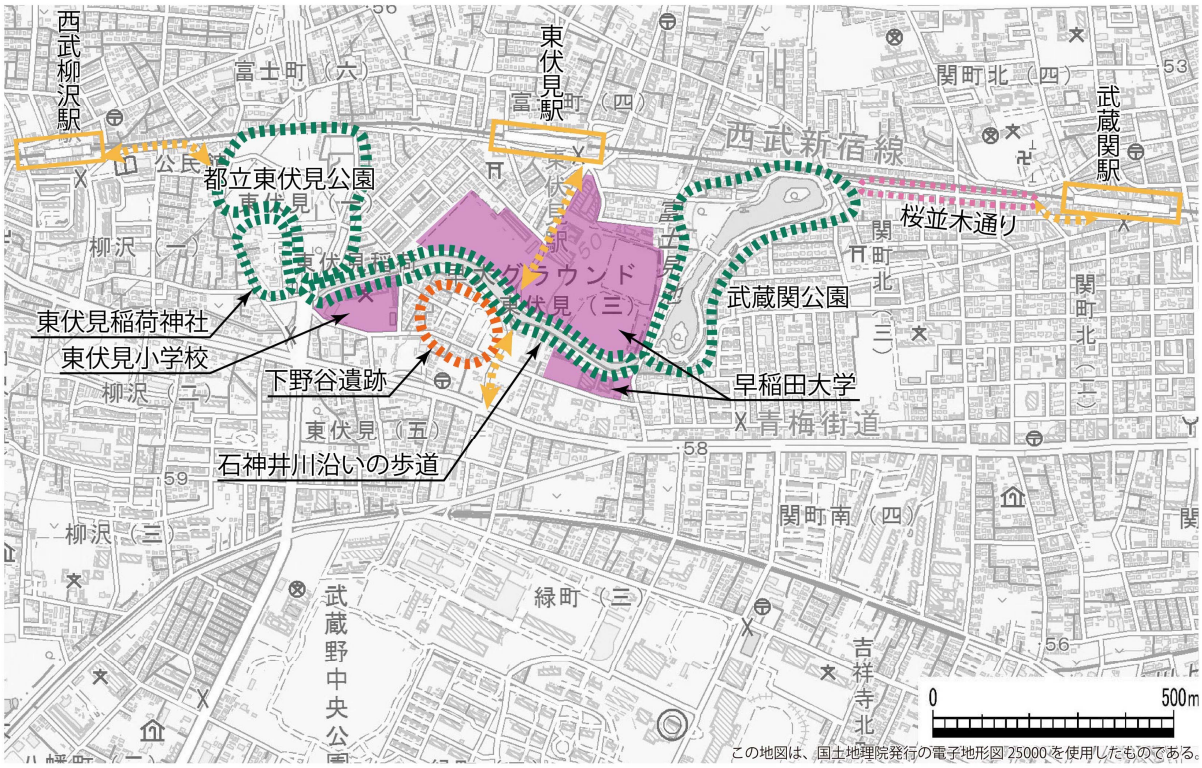


図 35　下野谷遺跡周辺

活用の柱４　「ともに育つ」

（１）市民と協働した取組や事業の実施

・地域の様々な主体との連携や市民参画、市民協働により、貴重な地域資源として市民に還元される活用を推進することが重要である。
・より市民が参加しやすい事業や仕組みを検討する必要がある。
・市民活動団体との協働による研究等を推進する。
・史跡に幅広い年代が興味を抱くような場の設置を検討し、世代を超えた知識・知恵の継承の場を目指す。

（２）他自治体との連携強化

・シンポジウムや普及体験事業など、近隣の自治体や全国の同時代の遺跡を有する他自治体と連携した活用事業を実施していく。
・縄文集落遺跡、石神井川流域遺跡、圧痕分析等をテーマにした研究連携など、様々なネットワークを構築し、他自治体との縄文時代の情報交流を行い、縄文文化研究のキーステーションとなることを目指す。
・市民交流等を積極的に行い、市民への還元を行いながら、下野谷遺跡の魅力とともに西東京市の魅力も発信する。

（３）史跡を核とした新たなコミュニティの創出

・人々が史跡を核としてつながりを持ち、史跡が新たなコミュニティの場となることを目指す。
・人と人との関係性が多様化したとされる都市部において、史跡が核となって新たなコミュニティの創出につながり、遺跡の新たな役割を示す都市部での遺跡保護のモデルとなるような史跡を目指す。